

會誌



第一年第三号

真黒の印度人ボーキにかしづかれて紅茶のスパンを彼は動かし乍ら食後の行動を考へてゐる、柳茶が突然躍り出した、白塵、混じた、人間が遠つてゐる、彼は窓から飛び出しだ、彼の白ズボンが真赤に染つた、横で一人の印度人が落ちて来た石の装飾で頭を打たれてつうくとして倒れると動かしくなつて了つた、暴徒が集つた、英人の女を取巻いてあぐつて、彼、其處へ飛込まんとする。彼の左手がくがられてゐた。

四

キヤバレーのティブルに彼はフヰリツピンのグンサ一五人に取囲まれてゐる、微笑、脚、トロンボンの上下、脚、微動、彼は何気なくスカートを引いて躍らうとした、ドワロースレス、息苦しうに彼は彼女のカールした髪に呼吸をしながら躍つてゐた。

五

香港の港、O.S.K.の船が出帆間際の黒潭を蒙々と吐いてゐる、六人を見送るべく彼日本人は栈橋の入口をしゃーとして這入らんとする、警官、彼はハンヅドツカーテ全身を検らべられてゐる、彼は支那海賊の片切れと見られた自身の顔を如何にくやしさうにゆがめてゐるか。

ランゲンのローヤル木テルのダイニングサロン、

撮つたものは浅間丸の砕破る波ばかりだつた。今度の旅行の晝のイントロダクションとする心算りであつた。处が漫遊客でふい悲しきに、港、港を廻つてゐる間にこの床氷が計畫は破壊されて了解した。今考へて見ると次の様な材料がふいでもなかつたの。

二

三

彼は馬を打つた、が口以ア、砂空を蹴つて疾走する、彼は地面に腰過にあつてゐる、口と鼻から砂が吹き出されてゐる、プロモは依然として煙を吹いてゐた。

六

海拔二千八百メートンギヤアンの頂上、坡馬上
の英姿、石楠花の繁み、夕焼、下方のサンドシ
ーは段々暗くあつて行く、彼はそれを眺め乍ら鼻を
くん／＼させてゐる、遙か日本の山々を思ひ浮べ
た彼は両手を高くさし上げた、仲間の健康を祈つ
て。
(支那栗)

先日奥野から「日本を去るに臨んでしもんて云
ふ事を書いたら如何だと冗談半分に言はれたがほ
んとは名文を残して行き度いのだが、浦松君の手
前もあるし又そんな事を書いて笑は此方のも豪腕
だからやめにする、殊に香港は陸つきではおい
がまだ／＼日本の延長見たいなものだし、そして
僕の仕事の性質上海路十日間の距離はそんなに遠
い處だと云ふ感じがぴんと來ない。どこへ行くに
も旅立ちのあはたゞしさはあるが日常の仕事の先
端を地で行くにと云ふだけでも別にとりわけ諸兄と
お別れするんだなんて氣もしない。港々には友人も
居る、一寸解からなければ直ぐ聞けるんだから難

コースの小行の下準備よりはある意味では却つて
樂かも知れない。

送別會やら額出しやらは世間並にやつてはゐる
が一寸変ふ氣もする。同じ土地に居ても會はふ
僅か三四年の在勤へ或はもつと在勤地が延びるか
も知れぬ)ではふんでもない事だ。

香港は一年半分以上は夏ださうだ。だから當分
はスキーもやれふい、地圖で見ると附近には登孔
さうな山も少いやうだからこゝしばらくは針葉樹
會とのさういつた方面の交渉は尋くなるだらる。
残念だが仕方がない。山へ凡そ補を持つて行く人
があつても山を引つ越さずわけには行かないから
せいで、背襟の脚活躍の跡を本誌ぶり御手紙なり
で拜見し度いもので。

愛用のスキーアは一昨年野澤峠で深い雪の下に半
分置き去りにしたつゝににしてしまつたし、リュ
ックは郷里の長持の底にガバ口あつて窓つてゐる
からもういつぞ思ひきりもい。

丁度今切符旅券の下附があつて C.R.C. の Book
をしてもらふ事になつたから失禮します、皆さん
御機嫌めり。又後から御便りします。

夜登る

池を根にして、道はダラ／＼の整りになる。四辺は真暗だ。秋の陽が落ちてかり、もう二時間もたつたらう。まだ降り足り無いのか。雨雲が、夜目に黒く、低く、垂れてゐる。發りきると道は右に左に岐れでは伸びて、その先は皆森の中へと入つて行く。その奥に、今も獸の呻りを聞くと云ふ。ギヤツと耳を劈く名も知らぬ怪鳥の叫びが闇に響く。

闇をすかして、道を擗ぶ。暗い中を、小休みもせず、たゞ押し黙つて忍り抜く。見上げて大樹齋木の下を行けば、ホタル／＼と、肩に、頭に襟首に落ちる冷やか水滴は、先刻の雨の梢に残ったのが、此の夜の静寂を重みに添えかねて、風もふいのに落ちるのか。曾ては、その昔、此の山で、幾百人の人の傷つき、血を流して、難に纏れたと云ふのも此の辺だらう。

暗黒、寂寥、然々として行く足元の小石の音のみが高い。突如、闇を破る梵鐘一打、韻々。鐘は此處上野の山に鳴る。虔草の灯はまだ遠く御堂の屋根はかすむ。

大阪難波から和歌山指して海沿ひに南下する南海電鉄の快速と車体のは麗さには鼻柱の強きを以て誇りとする江戸つ子も降参せざるを得なかつた。隨に大阪近郊の電車は東京のそれに優ること數段と深よくかぶとを脱いで置く。記勢西線は紀州半島の海岸線に沿ふて日方、加茂郷など目もさめる旅ふ美しい海辺を走る、南海の空に湧く入道雲も忘れ難い情景だつた。それにもまして見渡す限り車窓に入る丘陵の悉くが殆んど其頂近くまで密柑の木で掩はれてゐる有様は此地方ふりでは見られぬれども車窓近く枝もたわゝに実を付けてゐる。或ものは腕を伸せば届くかと思ふた。黄金に色づく頃の壯観が想はれた。大阪商船は此鉄道の開通により年約十万円の運賃收入を失つたようである。

南國の天地は又自然に感まれてみると見え。車窓に入ら農家の悉くは立派な瓦葺の整然とした屋並で、如何に富裕であるがも想像させると充分であつた。東北地方の旅で見かけらるいぶせき藁葺の伏屋とは非常な相違であつた。八月の末だといふに直射する陽は真夏の如く青汗はひとりでに流れ

南國の旅

南國といふのも少々大袈裟だが、先月末會社の用事で紀州へ出張し、紀州密柑の本場を通過した。

「日曜日」

今日は珍らしく日曜日一人で家にごろくして洗足池を眺めて居ります。

東京の人々は穢して変です、真夏の暑い日曜日には沢山の人々が熱に舟を浮べて汗を流して居ります。もう少し涼しい処は到る處にある様に思ひますがそれでも皆んが我慢して舟の中で日光浴をして居りますが今日の様に天気がよくて多少涼しい日には遊びに来る人は極く稀です。

こんふ日に舟を浮べて遊んだらさぞかし家族連の方々は愉快であらうと思ひますが、てんで見當りませんよ、皆んな僕の様に家に窓ころんで居る事でせう。

是れから多摩河原の人の少ない処へ行つて舟沢でも眺めて来ませう、此の舟沢山は僕が始めて地圖を見ながら行つた山なの不懐しみ深い山です土曜日の午後東京を立つたのでした、三井君と二人でした。

舟沢山には五寸以上の蛭が到る処に居て人が下を通ると落ちて来て血を吸ふのだなんて道筋のおばさんが語りますの恐ろしいや一杯でした。道志川が下に見える頃は河向ひの舟沢の山々が明かり見えたのですが、翌日は霧で少しも分らぬいで二人ともびくくもので、炭焼の簾に蛭岳迄連れて行つて貰ひました。そ

して舟沢山迄せめて連れて行つてくれ、案内料一円出さかうなんて二人で横んだ事を憶えて居る、三井君が道が一本しかないので道に迷つた道に迷つたと云つて歩かあかつた。

僕も其の頃は迷つたと思ひ乍ら歩いて居たら到底舟沢の頂に来てしまつた、それも陸地測量部の八が居たから初めて此処があの恐ろしい舟沢山だと云ふ事が分つた位だ、其の晩だつた大山の裏の森ヶ谷村とか何とか云ふ処へ下りて一番立派な家へ行つて泊めて貰ふ様頗るだ、

其の晩の歓待はほんとに嬉しかつた、忘れられ無い山の記憶の一つである。

何んにも子沢山へ狂女が葵野の町から駆け上つて死体を探すのに一月もかゝつた事ふざ諾してくられた。芳し途中で會つたとしたら多分二人とも吃驚して死んでしまつた事だらう。

それから三井君はふつづり山をあきらめた、恐ろしい恐ろしい山へ彼は遠去つたのだが僕は反対に恐ろしい山の招くが儘に山に漫つて行つた。そして一度の一諸の山行を機として反対の方向をとつた二人ではあるけれど懐しい三井君である、今は何処に居る事やら、こんな事を考へては何時でも河原迄山を眺めに行くのです。

秋はこんふ、たわいもな、思出でも一種云はれ
为懐しみ親しみを以て身に近る様を笑がします、
何處か又出掛けたくなりまふに。
(近ちせん)

博愛

人間と申しましてもこゝでは一見人或ひは殆んど
人といふ意味にまで用ひます。ほんとの人とい
ふ場合には特にしるしをつけます。ですから人間
と言はれて心易うがよころびにあらずやう。又人
を馬鹿にしてるとお怒りにふるとこれが大誤ち間
違ひです。

個人間は幸福を何かそれ以上のものとして求め
ませんから人生の目的は善それ自体であくて幸福
であります。人間が他の存在に比べて特に優れて
居ります。人は思想の方であります。この能力の發
達が人間に満足従つて幸福を與へます。従つて幸
福の主たる條件は理性の生活であります。

人間の性格の諸性質はこれを三列に並べる事が
出来ます。その各々に於て最初と最後の性質は極
端と畢竟であります。中間の性質は終々アレテ
一であります。そしてこれへの案内者が「黄金の
中庸」だと申します。

青聲は極端の時代であります。ですから私達の
仲間では自分の極端に偏してゐる事を自覚してゐ
る者は總じて小名前を中庸に附せずして却つてそ

の反対の極端につけます。狸は人間を馬鹿にして
却つてペンゼンを徳としましてこれと酒ばかり飲
んで居ります。又無自覺ぶ兩極端の偏執者は中庸
を目して最大の惡といいたします。彼等は中間に存
する八箇を互に反対の方に追ひやります。人と生
れながら猶には育大將といはれ熊からはバタと
呼ばれます。

誠に「黄金の中庸」は明確か判断と慾望の均齊
に依據します。経験の完成を必要といたします。
ですからこの限りに於て私達は到底幸福にする事
は出来ないかに見えます。臆病と狂恭との間に勇
氣を、吝嗇と浪費との間に寛容を、懶惰と貪望と
の間に大志を、卑屈と傲慢との間に謙遜を、多弁
と秘密癖との間に正直を、憂鬱と道化との間に御
嬢嫌を見出すふんて器用ふ真似は到底出来さうに
あります。然しそれにも拘らず私達は幸福でありま
せん。されば私達の仲間の六部分も甚だお恥し
い話ですが入でふいからであります。學業で亦い
からであります。研究室でシャツが午袋にかかるか
丸に掛るからであります。誠に博愛は正義よりも
大切であります。

(ハッタ)

白峯の事など
去年の夏鉄道省の映画を見て以来猛烈に釋れて

あた山であつた。

そして此の夏計らすも希望を実現させらる事が出

来た、

「南は暑いぜ」と云ふ言葉は耳にたこの出来り位い聞かざれて居たので充分覚悟はしてゐたのだが第一日青木湯巡の道で先づ悲鳴を覺げる。ドンドコ泥の駆りも活動窮屈の様に樂ヨは行かなかつた、

北御室の小屋は感じが良かつた。自分の行つた時は丁度月が良い時で此の小屋と大槻の小屋で見た月の色は忘れられないと云ふ。

斐駒は目眩の間に狂り、その隣には少しが肩を張つて並立して居る。

糸鞍から徳高、槍の連山も明さり見られた。こんなに時自分の心に浮ぶのは唯「山は良いあめし」との感嘆詞のみ。而も此の気持を忘れ兼ねればこそ山へ入り度くふろのだ。

農鳥の小屋で二日降り込められた。人夫の注言に従つて滞在中はオデヤばかり。但し味曾が品切又ふつてカレー粉のオデヤなる珍品を始食して見たが此奴ばかりは如何よ大食の小生もお代りをする事が出来なかつた。オデヤの食傷がたゝつて来る。恐ろしい事だ、西山温泉で人夫と飲んだビール今日まで走力ライスを見ると胸が悪くふる。恐ろしい事だ、西山温泉で人夫と飲んだビ

ルの甘い事、今度同行した人夫は白鳳會の秋山と云ふ男だがノーブルな顔立ちで温なし男だつた。欲もふつたら名産の葡萄を送つて呉れるとか。品物より、その気持を嬉しいと思ふ。

白鳳會の連中は一帶又親功だ、それは土地發展の爲めにどうなのかも知れぬが免に角氣持が良い。敢て燐火を持つておく。

静かな山の旅を望む人に南アルプスをおすゝめする。

(高橋)

七月は今年も亦ひどい雨続きで大閉口でした。徳澤の牧場の小屋で毎日／＼雨空を眺めながら暮しました。二十三日から八月四日まで十四日間、

きのことなくすゞを三度三度食べてみました。それでやつと天氣よなつて前徳高へ豊つたと思つたり、こんどは電報で東京へ呼び戻されてしまひました。カンカン日の照りつける東京へ。

上高地にも商賣人の競争が微しくなる時代が来ました。宿屋は今の所では清水屋が一番でせう。併し何時まで此の調子が続く事か。昔の清水屋今の温泉ホテルの馬鹿げてろとは詣き出したら切りがないからお詫しすることにしませう。

そろそろ秋の山の季節です。暇が出来たら直ぐにも飛び出せる様に山の食料も大分修業が出来

たの方々探して軽くて安いものを集めてゐます。どうです一緒に山へ行く人はありますせんか。但し食物と女房はへ此の方は未だ資格がほいけれども他人だよと云小主義で。

（佐美太郎）

今年の夏は暑かつた。実際暑かつた。暑の末のが早かつたから涼しくかるのも早からうとは誰もが考へてゐたのだが事実はまるで反対に何時にもつても涼しくならない。然し筆はれふいもの立秋」と脣に書いてあつた日からはやはり秋が訪れつゝあるのだなといふ感じが何とはなしにふつても涼しくならない。然しがれふいもの立秋」と脣に書いてあつた日からはやはり秋が訪れつゝあるのだなといふ感じが何とはなしにふつても涼しくならない。然しがれふいもの立秋」と脣に書いてあつた日からはやはり秋が訪れつゝあるのだなといふ感じが何とはなしにふつても涼しくならない。然しがれふいもの立秋」と脣に書いてあつた日からはやはり秋が訪れつゝあるのだなといふ感じが何とはなしにふつても涼しくならない。

石神井は中学以来僕には慕しい所ふんだが、猪野の彼方に秩父山塊を眺める秋が一番好きだ。くつさり登んだ空に浮き出したやうなれの姿。日の入りが殊によい。

動物園（本名は松籟園）を出て山へ散へる（ア）のも秋が一番多かつた。あの頃が暮かしい。

（トントン）

徳高行の事は一橋新聞及び如水會報（九月号）で見られ度し、日本アルプロスの一部を知つてから二度目又大町の傳刀林藏に連れられて五十歳と歴走してから此度の逆縦走の間七年間、山自身の変らぬ事と設備その他人工の変化たは驚くのみで來る、何も知らぬえ癖に何んでも知つてゐる様な僕さうな少しうをして横行する、氣持の悪い所だ。残間温泉はいゝふ、殊に宮賀での西石川は落着けれるね、貧弱がヒヤ／＼して泊る所がやあい。浅間と云へば僕は事によると今年中に會社の都合で松本へ轉仕にかるかも知れぬ、商大山畜部及び針葉樹會々員御定宿は覺悟の上、然しそれが実現しなければ一月か二月頃東京乃本社へ轉仕だ、そうチメンタリズムからばかりでもあいやうだ。北方へ關西一にゐては秋は來へない。土地柄ごとも云ふのだろう。武藏野と云へば石神井を恩ひ出す。

（ア）此の頃は中華民國の人々を相手にして働いて居る、中日親善の意味で保険に這入つて貰ふのだがこんな好都合の事は又々あるまい、「あなた金あります、身体丈夫、ボンボンあり、保険申込をよろし、生命保険、中日親善、共存共榮、大政融合よろしいある」支那語なんかチンブンカンブンだから總て此の調子だ。

その内に面白い失敗鏡、成功鏡も出来ると思ふ。
そしたら又背々御報告申上げる頃り

(ヘクマ)

今年はかほちやの當り年。道理で安いと思つた。
垣も山行きの當り年。一夏に四回も行つた。まあ
陰徳あれば陽報ありの方さ。然し俺よりまだ運
のいい奴が居る。今年藤井二年山岳部へ入つた許
りだのに懇意は明神を除いて全部やつつけやつ
た。末年すくなくやつて日本の中にはオオライだつ
てさ。山岳部が猛者が沢山居ると即ち充実してゐ
りと新入の者は得だ。

(ヘン)

て見ようと思ひます、ところだけ書くんだが
うその御頃りで願います。

雲ちやん、長い勢かのは、んと登つてゐる様だ
がホカ(續)いて行けふ。友別正しく歩く。食
事の時は蓋し君の一人舞うだ。味の如減筆詰の吟
味、説明食事の時は君ふくしては淋しい。
赤ちやん、あんなしい者つて得の狼で頃の様で、
損の様で得の様だ。余り働く所も見ない交りに余
り急げた所も見ない。

オノンチやん、小馬鹿らしい。若にかゝると馬鹿に
早くふる。いや此方が遅いのか。余り仕事は目文
つたことにやらなうが食事の跡始末をしたり、天
幕の困りを人知れず附けて置いた、君の苦心
は人の見えぬ所にある。地味だ。

学校の連中と一緒に沢の生活をやつて高橋の
峯から峯へとさよよい歩く事が出来てよかつた。
それよりも同じ心の同志が大人と大人と増して行
く事を感じて喜びしれぬ歓喜のあふるゝのを喜び
度い。内面的の結合、只陶然と酔つてゐる様の気
持で数日を過し得だ事を喜び度い。そして危険物
を一人連れて行ってくれた学校の人達に胸に深く
感謝致します。

沢生活の同志の面々の大穀を痛大御紹介し

トツツアン、トツツアンとは良くもつけた。蓋
きく、水と云ひまるで天幕の中の名主と云ふ格だ。
様だね、きよりが悪くあつたのかい、炊
國山、上高地から沢にベースキャンプを張り
に十貫も重い荷をかついで夙の皮をむいたり、炊
事や薪割りは好公など云ふ感を脱して趣味か遊樂
かと云ふ風だから、キヤンブは社会奉仕だ。誰か遊
一縷に行く人はありませんかね。危ねえ、危ねえ。
ドンちやん、近ちやんにそつくりだと云ひばな

あはなあと誰もうぶづく、常に諸國の中心人物だが只遊ぶやんより遠に丈となし、近ちやん燒つちやいけないよ。

虎次郎、つけもつけちり荒次郎とは、さぞかし名づけの主はうらまれてゐる事だらう、君鏡は以後見えないだらう。大食官だと云ふ事は前から覺名ほのかにうけたまわって居つたが幸か不幸小食つて食つて食ひまくる腕の冴えの程は拜見に及ばなかつた。

田中、もつと會にでもうんと出て早く山の連中

の空氣にひたつて貰ひ度く。

八三角

記録

(六月十一日—九月二十日)

六月二十八日—二十九日 松本謙三
三峰山と岩殿山へ行つたが雨にたゝられていづれも目的を果さず、

七月九日—十八日 稿高岳より槍岳へ、

蒲松佐美太郎、奥野綱重、吉澤一郎、

七月十六日—二十二日 厚恩白峯三郎、

高橋要三

七月二十四日—廿九日 稿高岳 松本謙三
一日は前稿高北尾根、一日は北嶺と涸次岳に上

る。

七月 徳高健次、霞沢三本槍、明神哲、蝶、長
辯、大滝山、

八月 奥又白谷より前穂高、奥、涸次岳、

浦松佐美太郎

七月廿七日—廿九日 八甲田山より十和田へ

真野綱重

八月三日—五日 富士山

八月九日—十七日 東北朝日岳

奥野綱重

九月十四日 大舟波川溯行 中川源一

豪雨に阻まれて川登頂を果さず、

八月 高岳山 吉澤一郎

奥野綱重

消息

松倉榮司、お子様は奈津子さんではなくて那津子さんにて付訂正、

日本郵船株式會社香港支店に轉勤

C/o Nippon Yusen Kaisha, Hongkong
Bldg., no. 8, Connaught Road
Kowloon

吉沢一郎、九月中旬から奥様が病つて居られます、

浦松佐美太郎、日本山岳会幹事に就任

小栗吉雄、二月より南洋、印度等に商用の爲旅行

中川深一、勤先浅野セメント株式會社は海上ビル
新館に移轉、

部室より

九月の新学期から学校が國立へ移つたので、本
科の山岳部も当然本據を移したのですが、未だ部
室が出来ないので、天氣の良い日は青天井の芝生
の上に、雨が降る日は寝つぱい假喫茶室の一隅を
占領して、児童のしない額をつき合はしては駄
辯を弄して居ます。

國立へ移つて學校から部室として、射撃部と共に
同で、一部屋貰ふ事と決定したのですが、其の部
屋を現在専門部の共益部が倉庫に使つて居るため
に、こゝ暫くは國立無宿つて云ふ訳です。けれど
部屋は一つ橋の部屋より幾分しつかりして居るし、
新築豫定の部室は資金の關係で當分又消えの形に
あるので、一ヶ年位は皆の生活の本據になるだら
うと思ひます。

針葉樹第五号の賣行は係の人から正確な總表は
ありませんが、損はしない模様です。一部の人の
皮算用がや少くとも百円の利益を出す積りだつた
らしいのですが、経費の事には殆ど無関心だつた
此度の編輯としては、大成功と云はなければあら

ないでせう。

國立に新築される各の部室は其の予算八百円の
内、針葉樹の利益がかかり重なる部分を占めて居
たので、ちよつと資金に艱難を生じて、現在のと
ころ立消の形です。ついぞうの事、今まで集つ
た金を何かに使って仕舞はふかしと云ふ様な暴言
も耳による仕事です。之は冗談たる事は勿論です
が、假令予定の金額を集め得たとしても、八百円
ぢや大したものも建ちそうにも無いが、山の本で
も買へば相當な文庫が出来るがああと考へる事も
あります。鉄筋混凝土建ちの新しい圖書館や教室
や小便室を見る度に、自分達の計画して居る山小
屋が貧弱なものぢやないかしらといふ心配が起つ
て来る様です。祝慶に過ぎなければ幸です。僕個人
としては、かわりな部室が手に入るのだからた
だ有耶無耶に引延して置くより一思に一年ぶり二
年ぶり計画を繰延べて、悔を残さない様にした方
が良くは無いかと思ひます。之はやる人に相談し
て一喝の下に退けられましたが、先輩及部員諸兄
の御意見を承りたいと思ひます
「それはさて置き、皆さん一度圖書館の塔の上
へ登つてごらん下さい。國立移轉時期尚早をいま
でもぐづく云つて居る様お奴は國立へ来て何を
して居るんだらうと云ひたくなりまます。富士をは
さんで、左には丹沢、大山が屏風を立て、右に小

金沢繞きのトブル形の山巒から雲取、白石等の秋の奥山が大きくなり上って、武甲山の方へ次第に山勢を低めて行くあたり、東の方、赤城、日光山塊の大きさが裾野ほど、山男に殆ど聴く事を知らしめないすばらしい眺めです。寒い冬の日によく石神井の大観櫓から見た時よりは、山々が一段と引立つて見えるのも亦部の連中を嬉びして居ります。そして山を眺めではつ行きたくあしと感じます。そして山を眺めではつ行きたくあしと感じながらも案外出掛けるものがふいのは多少心細い様な気がします。夏休み以後今までに行つたのは、予科で堀岡君が谷川岳へ登つた位なものでせう。

夏前の事ですが、聯盟の決議に依つて都として日本山岳会に入会しました。今のこところ年三四の本を貰ふだけが辰巳でせう。

學生聯盟も今までのところ殆ど効果的無何事もなし得下さいますが、六月以来地理的に加盟店を七つのセクションに分つて、各セクション毎に頻繁に会合して何事か得るところあらしめんとしで居るのです。學校は新宿を中心とするセクションに入つて、浦高、東醫、立大、早大と共に研究を進める事になりました。此の會合がよく行けば思ひます。

學校の内部に於ても、研究會とか報告會とか種

やりたいと思つて居る事もあり、去る六月半事を改選して左の諸君が夫々活躍せられる事に付た力ですが、何分夏休みと、學校の移転のため何事も部室が出来て安住の地が定まる迄は全部あります。

代表幹事

磯野計藏

庶務幹事 太田又一

會計

清水達雄

雪山清太郎

道具

鈴木英雄

芋川總一

丸茂平造

園山徳三郎

右の他聯盟へは磯野、高瀬、増山が出る事になつて居ます。

最後に夏の山行を簡単に列記しませう。まだ報告会の様なものがないので詳しい事も少らず、珍談、奇行の如きは何かの折に本人たちの口から直接耳に入れる事もありませう。

(1)

鳥帽子、槍継走へ七月一

田中、十令、宮

川、三人とも相当やりてあがら山の中では恐

(2)

篠笛、槍、徳高継走へ七月一

閑、斧木、

小橋、安達、打橋、此の一行は荷物の分担で揃ひたらしい。一部は槍かり槍決を経て直ちに上高地へ。

(3)

高瀬川湖行、槍へ(七月十四日—二十一日)

磯野、横倉、芋川、太田、中島、勞く事のういなるものが多かつたので太田君には気の毒

(4) であつた。

常念岳を経て上高地へ（七月）澤井、此の人は單身山に入る事がすきらしい。予科一年唯一の部員で又熱心ある事予科に其の比を見ない。將來を期待する。

(5) 燕、柏崎へ七月十四日—（十六日）増山

（リーグー）、小暮、賀井、大栗、中島其他、此班は一般から募集した初めての人々のみであつたが、元気は異常に盛んで、リーグーもたち／＼の模様。十七日前穂高に登つて一時遭難を傳へられたが、十八日午前三時頃無事下山。

(6) 上高地天幕生活（七月十日—八月六日）

園山、丸茂、大友、堀岡を初め、各班とも上高地に集合して霞沢岳、門神岳、穂高諸峰等を登攀して、長期の充実した山登りを体験した。此間、浦松氏は部員をよく指導して下さったし、又松本氏は一週間の暇を得て行を共にせられたる事を深く感び、感謝する次第であります。

(8) (1) 小さい友達との氣氛ふ山旅であつたらしい。
（鳳凰山鬼）（八月）丸茂平造其他
（魚沼駒）（七月）関、吹原其他
二人の額ぶれに依つて其の登山振を御想像下さい。

(9) 尾瀬、日光、武尊方面（八月）吹原、他
一名、彼独特の二人旅である。第二世小暮理太郎。

（中島）